

平成22年度 森プロ事業実績：飛騨高山・宝の森プロ

(平成23年3月末現在)

	H21年度	H22年度				5カ年
	実績	計画	実績	達成率	備考	計画
集約化(ha)		67	45	67%		233
作業道(m)		3,600	398	11%		19,100
間伐等	面積(ha)	20	8	40%	利用+切捨	215
	材積(m3)	1,500	748	50%		19,000
備考						

H22年度利用間伐等における所有者への還元額(補助金含む)

2,000 円/m3(予定)

施業集約化の状況

- 平瀬地区については、境界明確化事業がほぼ終了。明確化事業に伴う座談会や、作業路の線形説明座談会の時に、間伐についても同意をもらい、その後、現地調査による提案書を作成し、順次契約を進めている。

施業プランの活用状況

- 施業プランを提示して、還元予定額を明示することで、所有者の信頼を得ることが出来、スムーズな事業実行につながっている。現在のところ、施業プランを提示した契約率は100%である。



座談会の様子

施業プランナーの養成状況

- プランナー研修等に参加するとともに、研修内容やプラン作成ノウハウを水平展開して、森林整備部門すべての職員がプランナーになれるように進めている。

作業道の状況

- 当団地内の地形条件と、現存する作業道の状況、それに対して、素材生産を効率よく、且つ将来成長した中～大径材の生産も視野に入れなければならないという相反する条件の中で、4WDの4tダンプが走行可能で、0.45規格の重機が能力を発揮できるということを、当団地内での作業路作設における基本的な考えとした。
- 上記の考えに従い、集材距離は80m以下になるような路網配置、幅員は3.6mから無理が生じる場合は3.0mに低減したが、縦断勾配は短い距離の中では14～18%に達する場所も発生した。
- 地形条件が厳しいため、線形の踏査に時間を要した。
- 急勾配な上に一部ブレーカーを使用しなければならない岩地帯もあり、施工時に落石による斜面下部の樹木への損傷が発生したところもあり、大きな反省点となった。



施工前



荒切り施工後



ブレーカー使用状況

作業システムの状況

H22 木材生産性 3.6m³/人・日

- ・ 既設作業道→伐倒(チェーンソー)→集材(グラブ0.45/スイングヤーダ0.45)→造材(プロセッサ0.45)→4tダンプに積み込み→中間土場へ
- ・ 既設作業道→伐倒(チェーンソー)→集材(グラブ0.45/スイングヤーダ0.45)→造材(プロセッサ0.45)→搬出(6tフォワーダ)→10tトラック



スイングヤーダによる集材作業



ウィンチ付きグラブによる集材作業

森プロの成果

森林組合と森林組合員との関係

- ・ 座談会等で路網の必要性和間伐の重要性を理解していただいた。

森林組合について

- ・ 路網整備とともに間伐の承諾も得ることができるため、今後の事業地確保に弾みがつき、計画的な事業実行を可能にした。

中間土場について

- ・ 飛騨高山森林組合上宝営業所に設けた中間土場は、当組合のみならず、地域の木材の集積拠点として、多くの事業体で活用された。

急傾斜地における事業実行について

- ・ 今まであきらめていたような急傾斜地でも作業道作設と、その後の間伐、素材生産と、事業が行える可能性を見いだせた。

森林組合と飛騨農林事務所等との関係

- ・ 管内の地域座談会に県職員が同席し、県の立場から説明・指導をしてもらったほか、高山市林務課も地域座談会に参加することとなり、三者の協力関係が密になってきた。

JV構成員について

- ・ 愛宝産業(有)については、予定通り搬出間伐を実施した。冬季の事業を確保したことで通年雇用が出来、今後、この地域の林業の担い手として、大きく飛躍できた。

今後の課題

- ・ これまで、通うだけなら問題がない既設の作業道において、木材生産を行うには、路盤の強度不足といった問題が見えてきたので、既設道の補強をどのように行うかを考えねばならない。
- ・ 急傾斜地での事業実行について、まだまだ技術的に未熟であると自覚し、施業地の今後の状況を注意深く見続けるとともに、技術の蓄積を図らねばならない。
- ・ 森プロを契機に広大な飛騨地域の森林管理を進めていく上で、ここで得たノウハウを水平展開して行かなくてはならない。
- ・ その為にも宿願の森プロも含めた森プロ団地で組合員や職員、作業員を対象とした研修会をこまめに開催し、地域の森林整備を進めていく。